

運動部活動の指導場面における暴力の生起に関する 一考察

One Consideration About the Occurrence of the Violence in the Instruction
Scene of the Sports Club Activity

佐藤 国正

桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部

(2012 年 9 月 29 日 受理)

はじめに

運動部活動の指導場面における暴力は、長らく日本スポーツ界の懸案事項として斯界で頻繁に指摘されてきた。現場レベル、研究レベルで様々な警鐘が鳴らされてきたにも拘わらず、その改善が遅々として進まない状況にある。日本スポーツ界のこのような現状を憂い、運動部活動の指導場面における暴力の生起を運動部活動指導者のスポーツ観の形成から紐解くこととする。

日本におけるスポーツと暴力の関係を考察するには、近代日本におけるスポーツの受容を担った明治期、とりわけスポーツ普及の発信基地となった教育機関での指導の実際に注目する必要がある。

明治維新以降、近代国民国家の確立とともに、国家主義と武士道の精神との密接な関係を下敷きとする「日本的スポーツ観」¹を基底とした暴力を必ずしも非としない運動部活動の指導スタイルが先鋭化されてきた。この指導スタイルは近代スポーツの特質と関連した管理主義および勝利至上主義、教育の曲解に裏打ちされた体罰・しごきの正当化などを背景としていることは、昨今の暴力事件を証

左として多言を要さないであろう。

日本におけるスポーツの受容と暴力の相互関係

運動部活動が学校教育活動の一部として根付き、その多くが学校の先生によって支援され続けてきたことは明確であろう。そうした指導者によって支えられてきた運動部活動は、指導者の指導理念またはスポーツ観によって形成されていると考えられる。

そこでここでは我が国における運動部活動指導者のスポーツ観の形成に関して考察することにより、運動部活動指導と暴力の関係性を明らかにするものとする。

我が国におけるスポーツ集団内での指導場面に現存する問題の1つに、指導者の選手に対する暴力的行為が挙げられる。運動部活動指導場面での暴力問題はメディアを通じて報道されている。

運動部活動指導場面における暴力の問題に関して、阿江美恵子の『スポーツ指導者の暴力的行為について』² (1990) の研究、『暴力を用いたスポーツ指導の与える影響－学生への追跡調査より－』³ (1991) の研究、『運動

Kunimasa Sato : Faculty of Culture and Sport Policy, Toin University of Yokohama, 1614 Kurogane-cho, Aoba-ku, Yokohama, Japan 225-8503

部指導者の暴力的行動の影響－社会的影響過程の視点から－』⁴ (2000) の研究によって、学生が過去に運動部活動指導場面において暴力を用いた指導を受けていた実態を明らかにしている。

スポーツ活動における事故と暴力に関して研究を進めた西尾達雄によると、スポーツは、そのやり方や姿勢によって事故を生み出す背景を持っており、スポーツの外的要因によって強制され、その強制に伴う暴力も生み出され、出来なかつたら出来るまでやらせる、出来なかつたら叩いてでもやらせる、といった思想が教育や指導という名のもとでおこなわれていると考察している⁵。

こうした指導のスタイルは、いつの時代から生じ始めたのであろうか。

日本におけるスポーツの近代的な歩みの原点を辿り、スポーツの普及・発展に努めた教育機関に着目することによって、指導場面に存在する暴力との関係性を明確にできるひとつの手がかりになるであろうと考えられる。そこで、我が国のスポーツ受容を担った明治期におけるスポーツ観について読み解くこととする。

我が国におけるスポーツの摂取は、明治維新以降、欧米先進諸国から受容され、高等教育機関を母体として発展してきた⁶。我が国においてスポーツが広く人々に受容され始めることになったのは、文明開化を1つの皮切りとしてであった⁷。スポーツの文明開化は、新しい学校教育の展開と切り離しては考えられない問題であり、明治5年の学制発布以降にみられる組織的な学校教育の展開とともに、学校は欧米スポーツ摂取の中心的機能を担うこととなったのである⁸。

木下秀明によると、学制発布によって学校教育制度が発足した当初には、学校はスポーツという点で捉えることができるものは存在していなかったが、数年を経て知育・徳育・体育の三育主義の立場から知育偏重体育軽視の欠陥が指摘されるようになると、体育の具体化への努力が教育政策的水準で行われるよ

うになり、軍隊の感覚でのスポーツの導入がなされたと考察した⁹。

同様に、スポーツの受容形態において軍事的な側面が強いと考察した岸野雄三は、当時の学生スポーツには、一種の独特な雰囲気があり、犠牲、忍耐、服従、規律が重んじられていたと報告した¹⁰。

また、菊幸一は、明治期に導入された外来スポーツは、身体の鍛錬や精神の鍛錬の対象として位置づけられていたと考察した¹¹。

高津勝は、明治期以降スポーツを国家の政策や行政を介して発展させようとした指導者たちの思想は、我が国のスポーツの普及・発展を担ってきたといえ、未成熟な市民社会を基盤にして発展した日本のスポーツは、富強主義を国是とする中央集権的な学校体育・社会体育・軍隊体育とのかかわりで民衆が味あわざるをえなかつた悲惨な体験、さらに、そこに存在した体育・スポーツへの願いや主体的な営みを把握することなくして、国民的なスケールで変革の可能性を展望することはできなかつたと考察している¹²。

我が国のスポーツの普及過程について中村敏雄は、我が国を支配してきた思想は、追いつき追いこせ主義の人びとに共有していた現実主義的・機能主義的な思考・行動様式を果たし、猛練習をする土壌が培われていたことを言及した¹³。

加えて、軍国主義にみる思想と武道の思想を重んじ、伝統の重視と非合理的な練習方法などが行われ、そうした側面を備えてスポーツの普及が担われた我が国にとって、おのずと体罰を含む指導が行われていたことが理解できるといえるかと考察した¹⁴。

こうした識者の見解からも理解できるように、我が国は外来スポーツの摂取に際し、精神主義や身体強化を謳いスポーツを受容し、発展させてきた歴史が窺える。

当時のスポーツに励んできた人々の大部分は、精神主義や身体鍛錬の軍国主義的な側面に重きを置いた指導によって、この要素を色濃くしたスポーツ観の形成がなされた事実が

今日の運動部活動指導場面に刷り込まれているといえるであろう。戦後60年以上も経つ現在でも運動部活動指導場面において、精神主義や身体鍛錬を重んじる指導がなされ、指導者による暴力が行使され続けていることがこれを証明しているであろう。

日本的スポーツ観を基底とする運動部活動指導

明治期に受容されたスポーツが今日の運動部活動指導の場面では、どのような様相を示しているのだろうか。

我が国のスポーツ指導は、一般に“上から”の“俺についてこい”式の指導法が支配的で、ある一定のパターンを上から“教える（与える）”ことが優先し、“育てる（引き出す）”ことが軽視されがちであったといつてよい¹⁵。このような指導法は、我が国の歴史的な背景が関係していることが前項から読み解くことができる。

中村敏雄は、運動部という社会が生み出す民主主義の危機の基本的な構図を3つの契機で捉えると、第1に上下の厳格な人間関係、第2に暴力と抑圧、第3に勝つことの神格化を挙げることができ、この3つの因果関係は、上下の厳格な人間関係を基本的な前提としており、これを維持するために形式主義、態度主義があり、さらにしごき・暴力があり、このしごきや暴力を肯定するために、勝つことの神格化が存在すると述べた¹⁶。そして、逆な方向からその因果関係について説明することも可能であるとし、勝つことの神格化（勝利至上主義）により、何としても勝たんがためと称して、しごき・暴力が行なわれ、このしごき・暴力を成り立たせるために、上下の厳格な人間関係が必要なのだと言及した¹⁷。

こうした現象が運動部活動場面に鮮明に現れていることを阿江美恵子の『スポーツ指導者の暴力的行為について』¹⁸（1990）の研究、『暴力を用いたスポーツ指導の与える影響－学生への追跡調査より－』¹⁹（1991）の研究、『運

動部指導者の暴力的行動の影響－社会的影響過程の視点から－』²⁰（2000）の研究によって明らかとされた。これらの研究によって、学生がこれまで運動部活動指導場面において暴力を受けていた実態とその要因が明かされたのであった。

丹羽・種村・長沢の『運動部の戦績を規定する集団の構造と機能』²¹の研究では、スポーツ集団の構造上の特徴として権限構造が存在し、さらに勝利至上主義によって過度な練習の鍛錬性や暴力性を容認する土壤が生じていることが明らかとされた。

こうした権限構造に関連し深沢宏は、我が国の「タテ社会」に注目し、次のような考察を繰り広げた。我が国は元来「タテ社会」だといわれるように、日本人に人間関係が、あらゆる場所、あらゆる時間において、常に縦の序列によって行われていることが運動部活動場面では明確にみられ、この縦の関係は、階層や地位を重視する縦関係というよりも、むしろ年上か年下か、先輩か後輩か、という縦関係が重視される傾向にあると考察したのであった²²。

これまでの考察からも理解できるように、明治期よりスポーツは、教育の側面をもち受容され、それは人間形成との関連でも普及してきた。我が国において、人間形成を強調するスポーツ価値意識は修義主義といわれ、それは“苦しみのスポーツ価値意識”と言い換えることが可能だという²³。日本人のスポーツ観は、苦しみと隣り合わせであったともいえるのではないだろうか。

上杉正幸によると、日本人のスポーツ価値意識の特徴のひとつに、身体よりも精神を強調することであると考察した²⁴。

それは、体力や技術を無視するというのではなく、何をしても精神力が重要であるとする思考が重んじられており、闘志・ガッツプレーといった精神主義が日本のスポーツ活動における1つの特徴であると示したのであった²⁵。

このような精神主義は、根性・闘志・克己

心などと表現され、スポーツを行なうことは、精神を鍛えなければならないという主張にもつながっており、運動部活動の練習にかかわる精神性の問題として、しごき・暴力に耐え、「修行」し、「精進」することが、勝つためには必要不可欠なのだという精神主義、根性主義が根強く存在していることを中村敏雄は言及している²⁶。

日本人のスポーツ価値意識にみられる第2の特徴には、身体の強調による厳しい訓練が行われることであり、勝利のためには厳しい練習に耐え、精神を鍛えることが大切であるという自虐主義である²⁷。これは、厳しい練習であればあるほど、よいとする考えであり、そうすることで、強くなると信じていることである。前述した阿江美恵子の研究においても、学生が運動部活動指導に如何なる指導が行われようとその方法に反せず、従順に従う理由に自らの自虐主義が関係していることが理解された。

上杉は、第3の特徴として修養主義を挙げた。これは、精神主義や自虐主義と結び付き、スポーツでの苦しい経験は人間形成に役立つということの意味しているのである²⁸。つまり、運動部活動は人間形成の場であり、練習に厳しさや、それに耐えることは、社会生活を営んでいく上で大切なものであるとする視点である。

日本人のスポーツ価値意識の第4の特徴として、全力主義で挙げられる。結果にかかわらず何事にも全力で取り組むことを重んじ全力を尽くすことにより勝利が生まれ、敗戦した場合にも、それに納得するといった心得を要する考えである²⁹。

阿江や上杉、丹羽らの論考と共通して理解できるように、運動部活動指導場面において勝利至上主義の志向が強い場合、日本的スポーツ価値観が生じ、指導者の暴力の問題が表出し易いと考えられるであろう。日本人のスポーツ価値意識は、我が国の運動部活動に根付いており、明治期における武士道や軍隊の精神主義と全く無関係ではないと

いえ、そうした活動を尊重しながら進められていく土壌が存在していると考えられる。

中村は、運動部活動指導場面において、日常の繰り返しの中で感性が鈍磨し、先輩・後輩の関係にみる運動部内の人間関係の在り方や権限構造、理念や体制を肯定する観念が知らぬ間に形成されてきたが故に、しごきや暴力を容認する日本人のスポーツ観が生じていると結論づけた³⁰。

上記に示したように、今日の運動部活動指導場面には、木下が考察した日本的スポーツ観や上杉が論考した日本人のスポーツ価値意識が基底となっている為に、常識とはほど遠い行為や行動を受容する態勢が指導者や指導を受ける者の間に実在していることを明らかとした。こうした事情のもとに指導者からの暴力行為を愛のムチと捉える認識や勝利を得る為には精神を鍛え、身体を鍛錬するなどの過度の練習内容や指導を必定として容認していることが理解できる。

だからこそ、そこに生じる指導者からの暴力も必定なものだとする認識が生じていることが理解できるであろう。

まとめと結語

我が国はスポーツの摂取に際し、精神主義や身体強化を謳いスポーツを受容し、発展させてきた歴史があり、その影響力が運動部活動場面に色濃く根付いていることが理解される。文明開化より、スポーツに励んできた人々の大部分は、精神主義や身体鍛錬の軍国主義的な側面に重きを置いた指導によって、この要素を色濃くしたスポーツ観の形成がなされた事実が今日までの運動部活動指導場面に刷り込まれているといえる。

戦後60年以上も経つ現在でも運動部活動指導場面において、精神主義や身体鍛錬を重んじる指導がなされていることや指導者による暴力が行使され続けていること、さらには、こうした指導を必定なものであると捉える認識が指導者と指導を受ける者の間で生じてい

ることが理解できるであろう。

今後の課題として、暴力が人間の本性的なものであるとした視座に立ち本テーマを論考する。特に動物行動学者であるコンラート・ローレンツが論究した暴力を攻撃事象とした捉え方に着目し、運動部活動指導場面における暴力行使の心理的過程を明らかとしたい。

【註】

- 1 木下秀明：『スポーツの近代日本史』。杏林書院。1970。
- 2 阿江美恵子：「スポーツ指導者の暴力的行為について」『藤村学園東京女子体育大学紀要』。東京女子体育大学。(25)。1990。pp. 9 - 16。
- 3 阿江美恵子：「暴力を用いたスポーツ指導の与える影響－学生への追跡調査より－」『藤村学園東京女子体育大学紀要』。東京女子体育大学。(26)。1991。pp. 10 - 16。
- 4 阿江美恵子：「運動部指導者の暴力的行動の影響－社会的影響過程の視点から－」。体育学研究。(45)。2000。pp. 89 - 103。
- 5 西尾達雄：「スポーツと暴力－暴力の背景と近代スポーツの疎外－」。日本社会事業大学研究紀要。(35)。1989。pp. 44 - 45。
- 6 中村敏雄：『体育原理講義』。大修館書店。1987。p. 132。
- 7 木下秀明。前掲書。p. 15。
- 8 木下秀明。前掲書。p. 15。
- 9 木下秀明。前掲書。p. 16。
- 10 岸野雄三：『体育の文化史』。不味堂書店。1959。p. 37。
- 11 菊幸一：「スポーツ指導の社会学的基礎知識」糸野豊編『現代スポーツ指導者論－その社会学的見方・考え方』。ぎょうせい。1988。p. 3。
- 12 高津勝：『日本近代スポーツ史の底流』。創文企画。1994。p. 11。
- 13 中村敏雄：『日本のスポーツ環境批判』。大

- 修館書店。1995。pp. 8 - 9。
- 14 中村敏雄。前掲書。pp. 13 - 17。
- 15 糸野豊：「わが国のスポーツ指導－その特性と問題点－」糸野豊編。前掲書。p. 3。
- 16 中村敏雄。前掲書。1987。pp. 144 - 145。
- 17 中村敏雄。前掲書。p. 145。
- 18 阿江美恵子。前掲書。1990。pp. 9 - 16。
- 19 阿江美恵子。前掲書。1991。pp. 10 - 16。
- 20 阿江美恵子。前掲書。2000。pp. 89 - 103。
- 21 丹羽劭昭・種村紀代子・長沢邦子：「運動部に戦績を規定する集団の構造と機能」体育・スポーツ社会学研究会編『体育・スポーツ社会学研究8』。道和書院。1989。pp. 139 - 160。
- 22 深沢宏：「スポーツ集団発生の原点」体育社会学研究会編『体育とスポーツ集団の社会学』。道和書院。1974。p. 29。
- 23 上杉正幸：「日本人のスポーツ価値意識と道・修行の思想」体育・スポーツ社会学研究会編『体育・スポーツ社会学研究1』道和書院。1982。p. 40。
- 24 上杉正幸。前掲書。1982。p. 40。
- 25 上杉正幸。前掲書。1982。p. 40。
- 26 中村敏雄。前掲書。1987。p. 146。
- 27 上杉正幸。前掲書。1982。pp. 41 - 42。
- 28 上杉正幸。前掲書。1982。p. 42。
- 29 上杉正幸。前掲書。1982。p. 43 - 44。
- 30 中村敏雄。前掲書。1987。p. 146。

【参考文献】

- 1) 今橋盛勝編：『スポーツ－部活』。草土文化。1987。
- 2) 岸野雄三：『体育の文化史』。不味堂書店。1959。
- 3) 木下秀明：『スポーツの近代日本史』。杏林書院。1970。
- 4) 久保正秋：『コーチング論序説－運動部活動における指導概念の研究－』。不味堂出版。

- 1998.
- 5) 桑野豊編：『現代スポーツ指導者論－その社会的見方・考え方－』。ぎょうせい。1988.
- 6) 杉本厚夫：『スポーツ文化の変容－多様化と画一化の文化秩序－』。世界思想社。1995.
- 7) 高津勝：『日本近代スポーツ史の底流』。創文企画。1994.
- 8) 中村敏雄編：『外来スポーツの理解と普及』。創文企画。1995.
- 9) 中村敏雄：『日本的スポーツ環境批判』。大修館書店。1996.
- 10) 中村敏雄編：『境界を越えるスポーツ』。創文企画。1999.
- 11) 西島央編：『部活動－その現状とこれからのあり方－』。学事出版。2006.
- 12) 森川貞夫・佐伯聰夫編：『スポーツ社会学講義』。大修館書店。2000.